

Welcome to megacenter Dungeon
beginning novels series

人食い ダンジョン ようこそ!

Volume
2

小説 一年新
イラスト しりー



試し読み版



Contents

beginning novels series welcome to maneater dungeon

story by hitotose arata · illustration by siri

2

序章	蜘蛛の巣の街へようこそ！	7
第一章	暗殺ギルド強襲	10
第二章	地下水路の蛇姫	60
第三章	表の顔、裏の顔	90
第四章	娼館「蜘蛛の巣館」	118
第五章	支配と複製	138
第六章	曲馬団の祭り	165
第七章	魔物の主	188
第八章	賞金首	223
第九章	水面下の争い	244
第十章	番 <small>つがい</small> となつて	266
終章	鷲獅子の密談	288
書き下ろし	閑話・誰も昨日に戻れない	291
特別付録	キャラクターデザイン案	318

序章 蜘蛛の巣の街へようこそ！

怒っているとは思ふし、それを咎めるつもりもない。君からしてみれば当然のことだ。

僕自身は他人を責めることができるような聖人君子ではないし、この状況に君を陥れた片棒を担いでいることは認めよう。ただ、黒幕かと言われると、そうではないとだけは言っておくよ。それに、もうわかっているとは思ふけれど、僕以外にも君を追いつめようとしていた勢力があったことはわかっているだろう？

そうだ、君は既に追われる身だった。君が逃亡者になったときからなのか、この都市に来てからなのかは、僕にはわからないけれど。他の連中……ある程度予想はできるけど、彼らの狙いが何かまではわからない。案外、君を捕まえて、剣闘士にしようと思っただけかもしれない。まあ、この都市には闘技場なんかないんだけどね。

僕が何者かだつて？

……ああ、もうわかっているんだね、勘がいい。ああ、君の予想通りさ。鉾山村の住人を皆殺しにし、魔物の住む地獄に変えたといわれるあの「人食いダンジョン」の魔物というのは、つまり僕のことだ。

とはいっても、伝説には尾ひれがつきものだし、僕はもともとあの村で生まれ育つたんだ。皆殺しにしたのは僕じゃないし、むしろ殺されかかったんだだけ……そんなことを言っても、信じてもらえるわけもないだろう？

君だつて、それはわかっているんじゃないかな？

僕たちの人生は、自分で決められないことのほうが多い。本当に、色々な運命とかいうものや、誰かの都合に振り回されてばかりだ。もちろん、自分が他人の人生を振り回すことだつてあるから、それは仕方ないことなんだと思う。

誰も好きこのんでこんなことになったわけではない……というのは、おそらく僕よりも君のほうが言い

たい台詞だと思っただけだね。

僕は君を脅迫している、あるいは、脅迫できる立場から交渉を持ちかけている。そんなことは百も承知だし、正規の方法で話を持ちかけても君は相手にしてくれないことはわかっていた。だけど、それでは僕の依頼人は満足してはくれないからね。

……予想がついたみたいだね、僕に依頼した者が誰なのか。

ああ、僕だつて驚いた。一度はまともな大人のふりをして、やめるように論じたことだつてあるんだよ？

結果は、ごらんの通りだけだ。

君は隠している。社会も、自分も認めることがない欲望を。君はなかったことにしようとしている、あつてはならないことだと。既にあの日から、導火線に火がついてしまっているのに。

僕は魔物だ。きつかけは何であれ、自分の欲望のために人間の世界の倫理を無視することを選んだ魔物だ。だから、君に罪を犯すように勧めている。僕にだつて

わかる、君が心の奥底で望んでいるこれは、間違いく世間では罪と言われるだろうことだ。

だからどうした。君はそれを望んでいるし、それを隠そうとして、なかったことにしようとして、あんなにも苦勞していたじゃないか。耐えていたじゃないか？

……耐える必要なんて、どこにもないっていうのに。さあ、改めて聞こう。

この世の中はきれいじゃない。この水門都市エブラムにも、表の顔も、裏の顔もある。コインの裏と表にはずいぶんと違う絵が描いてある。それに、この街は蜘蛛の巣みたいなものさ。遠くから見ればきれいだけれど、どこもかしこも獲物を狙う罠ばかりだ。

君は既に蜘蛛の巣に捕らえられた虫のようなものだ。僕の提案は蜘蛛の毒で、人の道はずれた魔物の道への案内状だ。断ることはできるかもしれないが、僕以外の追跡者が僕よりまともという保証はどこにもないし……あの子は、僕が押さえていることは忘れないで

くれ。

恨むなら僕を恨め、あるいは自分の運命とか、神を恨むのもいいだろう。だからといって、事態は何も変わらないけれどね。

これから先の選択肢は、食われるか、君も蜘蛛の仲間になるか。

僕が提示できるのは、この二つしかない。

あまり悩む時間はない。僕も、僕の依頼人も、君を逃がす気は毛頭ない。だから、こう言わせてもらうよ、
剣闘士。

……ようこそ、人食い、タンジョン蜘蛛の巣の街へ！

第一章 暗殺ギルド強襲

日没の鐘が鳴り、水門都市エブラムの各方向にある陸の門が閉まってから、歓楽街には改めて灯がともる。

この国の辺境に位置する都市としては有数に大きいエブラムの街は、都市内の固定人口二万を超え、近隣の町や村の住人やら、通過していく隊商や一時的に住み着いている職人やらを加えれば五万近い住人を抱えている。それゆえに、この大都市でしか保てない種類の職業が多く存在する。

その一つが、専業の娼婦や男娼であり、専門の風俗店街だ。

大きめの町に行けば、酒場兼宿屋の一角に数人の娼婦が陣取っていることはさほど珍しくない。しかし、それが組織化され、複数の建物で専門的に営業するとなると、並の大きさの町では維持することも難しいだろう。そういう場所では、旅芸人の一座や旅の吟遊詩人たちがそのような役割を請け負って路銀を稼ぐこと

もある。

※ ※

エブラムは水運の街であり、街中には縦横無尽に大小の水路が走っている。歓楽街近辺では、エブラム伯の援助もあり、船を係留する棧橋のないところに柵やベンチを作り、ランプを設置することが推奨されている。

そのため、もともと常夜灯を設置することが義務付けられている棧橋以外でも、夜であってもある程度は道が見えるようになっていく。それだけ、酔って水路に落ち、命を失う者が多いのだろう。ただし、このエブラムでも、棧橋と同程度の密度で街路に灯がともされているのは大通りと広場くらいだ。都市であっても、夜は暗いものなのだ。

※ ※

歓楽街のはずれにある倉庫から、一人の女が通りに顔を出す。腰まである、一本にまとめて編み上げられた髪の毛が動きに合わせて揺れる。女は南方系の血を引いているのか、やや褐色の強い肌色をしていた。目

は細く、何が楽しいのか、口元はにんまりと笑っているのがわかる。

灯りがあっても、酒場の前以外は薄暗い路地を迷うことなく抜け、普通の通りへと移る。女の目線が、進行方向先のベンチで止まる。そこに、一人の女が座っていた。

※ ※ ※

通常であれば既に家の中で夜の祈りを捧げているか、酒場で飲んだくれているような時間だ。飲みすぎて酔いを醒ましているようにも見えない。ベンチに座っている女の影が、一瞬巨大な化け物のように見え、褐色の女は一瞬だけ息を呑む。その表情が柔らかくなったのは、ベンチの人影が立ち上がり、見覚えのあるハンドサインを出したからだ。

※ ※ ※

「なんだ、ディアナじゃないノ。戻っていたなら、早く言ってくればよかったノに」

南方の詭りが残る言葉で、褐色の女は声をかける。ベンチから立ち上がった女……ディアナは軽く手を上

げ、気さくに答える。

「そう言わないでよ、チャナ。こっちだつて大変だったのよ。ついさっき滑り込みで入ってきたんだから。予定が少し変わって、一日遅れになったわ」

チャナと呼ばれた褐色の女と、ディアナと呼ばれたシヨートヘアの女は共に、この水門都市エブラムに巣食う暗殺ギルドに所属する下級幹部だ。様々な汚れ仕事を請け負う裏家業……これも、大都市ではないと維持できない特殊な職業といえるだろう。

「ディアナ、ちょうど今日ノ昼に軍ノ伝令が来たつて聞いたわヨ。アナタのやつてたアレ、うまくいったみたいネ？」

見知った仲間のところまで近寄り、声を潜めて話を続ける。流石に、誰が聞いているともわからないのだ。声も潜めるだろう。

「まあ、トラブルがなかったわけじゃないけどね。あたしとしては、時間はかかったけど満足できる結果になった。……報告は明日でいいから、今日はあんたと喋って飲もうかと思つてね」

頭目が変わる前から、二人は組んでいた。未だに、組織内での役割は違えど、一番近い存在だろう。

「あら、嬉しいこと言うネ？　ちようど、新しい子を調整してるところなノよ。せつかくだから、味見していく？」

チャナの言葉に、ディアナは苦笑いで返す。ディアナの耳に小さなピアスが飾られているが、暗闇の中、チャナは気づかない。

「あなたの趣味は癖があるからねえ……まあ、せつかくだから、楽しませてもらおうかしら？」

二人の女が連れ立って道を進む。その姿が闇の奥に消えてからしばらくして、一台の馬車が後を追うように進んでいく。

※ ※

歓楽街からはずれ、商人たちが使う住宅街と倉庫街の中間辺りにある小さな家屋に、チャナの隠れ家があった。地上階はただの倉庫兼住居、ワインをしまふ半地下の倉庫の奥にある隠し扉を抜け、階段を下りていくと……土と水、そしてあふれるほどの草木の緑の

香りが充滿している広い部屋にたどり着いた。

「チャナ、あなたの薬草畑、また拡張したの？」

「そう。珍しいのが……今度は菌糸が手に入ってネ？　これがおもしろい特質持つててサ。スライムつて知ってるよネ……」

チャナは暗殺ギルド内の薬と毒の管理を一手に引き受けている薬草師ハーブリストだ。もつとも、組織内でのあだ名は「毒使い」。暗殺ギルドで使っている毒などの薬品は、チャナが育て、作り出したものがほとんどだ。

「詳しいことはわからないから、いいよ。それにしても、あの抗毒剤は本当に効果があったわ」

ディアナの言葉に、菌糸の説明を始めようとしていたチャナはにやりと笑う。

「無駄に済んだら一番だったけど、効果が実証できたのも嬉しいネ。で、どうだったノ？　噂のダンジョンマスターとやらは」

「いい男だったわよ？　あのくそ女たちから乗り換えたくなるくらい」

その言葉の裏にある事実は、まだディアナしか知ら

ない。上司に対するただの愚痴と受け取ったのか、チャナは苦笑して言葉を返す。

「ここは平気だろうけど、誰かに告げ口されたら怖いヨ？ 特に、蛇姫サマは蜘蛛姫サマが居ないと荒れやすいからね。……さて、改めて、紹介するヨ。ハリー、フレッド。ご主人サマとお客サマにおもてなしをするんだヨ」

柱の脇にあるレバーを操作し、チャナは奥の部屋に声をかける。鍵がはずされる金属質の音が響き、しばらくするとジャリジャリと鎖を引きずる音がする。しばらくして現れたのは、まだ顔に幼さの残る二人の少年。それぞれが小さなバスケットに一人分の水差しとコップ、そして小さな酒瓶を入れて持ってきている。

※ ※

一人はこの地方の生まれらしく、白い肌にこげ茶色の髪。元は凜々しかったであろう整った顔立ちは、我慢できない何かに耐えるように震えている。もう一人は南方の少数民族に聞くような、黒檀のような黒い肌、灰色の髪。気弱そうで、少女のようにも見える顔

立ち、もう一人の少年同様に震えている。

二人の少年は、革の首輪に金属の鎖がつかねられ、両手には革の長手袋、両足にも同様の、膝まで覆う革の靴下を身につけている。それぞれの肌の色と逆に、白い少年には黒の、褐色の少年には白の衣装だ。そして、衣服はそれだけで、胴体は裸体をむき出しにしている。何らかの薬品を使われているのか、歳相応の皮を被った小柄なベニスはこのような状態でも屹立している。

「白い肌のちよつと強気なのがハリー、黒い肌の内気な子がフレッドだヨ。ちよつと前に手に入れて、今日でそろそろ一週間くらいかな？」

楽しそうにチャナが説明する。その瞳には欲情の火が灯り、細い舌がべろりと下唇を舐める。

「あんたの趣味も、来るところまで来た感じね。で、なんでこの子たち、尻尾を生やしてるの？」

バスケットを受け取りながらディアナが指し示した先は、少年たちの小さな尻。そこには、肛門に差し込まれた尻尾状の飾りが垂れ下がっていた。

「そうネ……ハリー、なんでそんな尻尾をつけてるか、お客サマに教えてあげて？」

チャナは自分のところにやってきた白い肌の少年のペニスをつまみながら、少年の耳元に囁く。

一週間の間に、様々な仕込みをされたのだろう。ハリーは一瞬戸惑い、顔を赤くし、屈辱に震えながらも小さな声で答える。

「……です」

しかし、その声は小さく、ディアナには届くかどうか程度の大きさだろう。密偵として訓練を積んでいるディアナはすべて聞き取れることはできたのだが、チャナが望んでいることを理解し、こう答える。

「ハリー、声が小さくて聞こえないわ？ フレッドといつたかしら、君はどうなの？ 君もお尻に尻尾を生やしているけど……好きなの？」

褐色の肌のフレッドは、ハリーよりも我慢ができないのか、勃起したペニスをディアナの手に擦り付けるように腰が浮いてしまっている。既に、先走りの液体が漏れている……おそらくは、チャナとディアナがこ

こに帰ってくる前から勃起は続いているのだろう。

「ハリー？ お客サマの質問に答えなきやネ。さあ、もつと大きな声で鳴いて？」

チャナがハリーのペニスをねじる。小さな悲鳴を上げ、歯を食いしばってからハリーと呼ばれる少年が答える。

「あつ……チャ、チャナ様に……僕のお尻の穴を、ずぼずぼしてもらうためです！ すげえ……すげえきもちよくて、俺、女の子になったみたいで……」

「そうよねえ、最初は反抗的だったけど。ハリーはもうアタシにお尻を責められて喜んじゃうへんたいだものね」

チャナが嬉しそうに声をかける。ディアナは小さく、あきれたように肩をすくめる。

※ ※

ディアナの長年の相棒であるチャナには少年愛の性癖がある。それは彼女が親に暴行を受けていたらしいこともあって、成人男性に恐怖を持ってしまっているのが原因らしいのだが、そこは今更どう言うべき



ものではない。

暗殺ギルドの頭目であるアラクネによって、ディアナもチャナも愛玩動物として犯されたり、売春宿で客を取らされたりすることがあった。それはディアナにとつては、支配者の再確認であり、屈辱ではあるが苦痛ではなかった。しかし、成人男性を相手に客を取られるのはチャナにとつては大きな苦痛であり、大きなストレスになっていったようだ。

組織内である程度の地位を得てからは、チャナはこのような小さな悪徳にふけるようになった。親に捨てられた浮浪児、買い取った奴隷、時にはさらってきた。

無力な男の子を調教し、性の対象とすることでしか、彼女は快感を得ることができないようだった。

※ ※

ディアナの身につけている装飾品を通じて、僕……付与魔術師にして、元人食いダンジョンの主であるエリオットは、葉草師チャナの隠れ家の中の状況を確認していた。……なんというか、性癖というのは色々だ。

「……あの子たち、可愛いですね、ご主人様あ」

そう言つて一緒に水盤を覗き込んでるのは、ワイドッグにして盗賊のシロ。割と趣味が近いのか、尻尾がピコピコと振られている。

「……かわいい、とは思うけどさ。ああいう趣味つてどうなの？」

顔を背けているが、見てはいるのだろう。口を出してきたのは淫魔にして精霊を扱う魔術師のサラ。二人とも、僕の下僕にして眷属だ。

「いや、その……僕は同性を抱く趣味はないよ？」

確かに扇情的な状況ではあるし、二人の少年奴隷は結構顔立ちが整っている。かといって、同性であるという事実が心理的には大きく立ちはだかる。それに、今回の目的はディアナが寝返らせたいと言っていた葉草師であつて、あの子たちは別だ。

「でも、あの二人、女の子みたいな顔つきですよ？ご主人様が魔物にしてあげたらいいんじゃないですかあ？」

「エリオット、あんたそもそも、あたしたちの……そ

の、お尻を散々犯したくせに。男だって同じお尻の穴じゃない。何か違いがあるの？」

サラの言い分には一理あるような気がするが、それは大きく違いがあると言いたい。ただ、男の魔物を手に入れることについては、あってもいい気がしていた。「……シロ、サラ。君たち、あの子たちとセックスしてみたい？」

※ ※

「ハリー、お前は男の子なの？ 女の子なの？ チンポ、アタシのおま〇こに入れてズコズコしたいノ？ それとも、チンポをお前の尻ま〇こに入れてズポズポされたいノ？」

おそらく、淫語を言い、言わせることで興奮を覚えるタイプなのだろう。チャナは細い指先で、勃起したままのハリーのペニスをもてあそんでいる。勃起が収まっていないのは、おそらく何かの薬物を使っているからだろう。

「じゃあ、フレッド。君はあたしにご奉仕してもらおうかな。うまくできたら、あたしとヤラせてあげるわ

よ？」

ディアナはそう言うのと姿勢を変えた。少し視点が低くなる。おそらく座っているソファの上で腰を落としたり、大きく股間を開いたのだろう。フレッドと呼ばれた少年が、ディアナの股間をまじまじと見つめて、幼い表情に欲情をたぎらせている。

「お客様、おちんちん……おちんちんが切ないです。出したい、出したいですっ！」

切羽詰まったフレッドの言葉に、チャナが小さく叱責する。

「フレッド、お客様に何をお願いしてるノかな？ アナタはご奉仕する奴隷なのに、なんでご奉仕させちゃうノ？」

「ひっ……ご、ごめんなさい、ごめんなさい！ 申し訳ありませんでした……」

一週間で体には絶対的な恐怖が刻まれているのか、勃起だけはそのままに褐色のフレッドが青ざめる。

「ああ、怒っていないから大丈夫よ。……じゃあ、口ですしてもらえる？」

フレッドはすぐさま膝をつき、ディアナの股間に顔を埋める。子犬がミルクを舐めるような、ペチャペチャという音が聞こえだす。

「あら、結構うまいわね……」

その様子を見て、チャナが満足そうに声をかける。

「一週間かけて、ゼロから仕込んだからネ。結構いいでしょ？」

それだけ言うと、顔を戻してハリーに再び声をかける。

「……で、返事はまだ？」

返事の許可をもらったハリーは、切なそうに腰を動かしながら、大きな声で叫ぶ。

「あつ……い、入れたいです！ チャナ様のおま〇こに、チンポ入れて、ズコズコしたいですっ！」

「よく言えました。じゃあ、いいヨ？ さつきから、アタシもべちよべちよなんだヨね。さあ、ここにズコズコして……」

チャナが自らの股間を大きく広げ、両手で脚を抱えて持ち上げる。待ちきれないというように、ハリーは

勃起したペニスを挿入しようとする。しかし、まだ慣れていないのだろう、うまくは入らず、何度かやり直してようやく成功する。

「ああ……ああ、あああ、あ……いいつ、チャナ様の中。すごくいいですう……」

チャナは決して大柄ではない、むしろ小柄なほうだが、それでも少年よりは体が大きい。小さな少年と大人の女性の性交は、まるで男が女の肉体に包み込まれるようにも見える。

※ ※

「ディアナ、悪いけど、フレッドを戻してもらえろ？」

チャナは隣に座るディアナに声をかける。ディアナは悪友の意図を察すると、自分の股間に顔を埋める褐色の少年の頭をつかみ、引き離す。怪訝な表情でディアナを見上げるフレッドに、ディアナは命令を下す。

「あなたのご主人様の命令よ、フレッド。……あつちと合流して、あなたのすべきことをしなさい。やることは、わかっているかしら？」

もう、仕込まれているのだろう。フレッドが立ち上

がり、勃起した小さなペニスを握り締める。ソファに座るチャナ、その正面で腰を振るハリー。そして、その後ろにフレッドが立つ。

チャナは両足で、ハリーの体をがっしりと押さえる。ハリーは何をされるのか理解したようで、一瞬だけでもなく。

「フレッド、やめ、止めて……!」

「ハリー、君だってしたじゃないか……それに、ボク、もう我慢できない……入れたくて、入れたくて我慢できないんだ!」

フレッドがハリーの尻をつかみ、ハリーの尻穴から尻尾を引き抜く。既に薬液が染み渡っているのか、ディアナの鼻腔には腸液の臭いではなく、刺激性のある薬品の香りがわずかに感じられる。一、二度指で具合を確かめて問題ないと判断したのか、フレッドはためらわずにハリーの尻穴にペニスを突き込む。

「あがつ?! あつ、ああああ……!」

苦痛と快楽の混合した何かに、ハリーが悲鳴を上げる。チャナはバスケットの中にあつた小瓶から、紫色

の液体を自分の口に含むと、ハリーに口づけてその液体を飲み込ませる。

「ハリー、フレッドに合わせて、腰を動かすんだヨ? 君のオトコノコでアタシを気持ちよくして、お前のオンナノコでフレッドも気持ちよくしてあげるんだヨ?」

「うわああああ、あああ、あ、あああ、あああ!」

フレッドも、ハリーも、もうまともな言葉が出てきていない。異常な快楽に神経が焼きついてでもいるかのように、動物的なセックスに熱中している。

おそらく、長くはかからないだろう……こちらも、準備を始めよう。

※ ※

「……チャナ、あんたの趣味もずいぶん突き詰められてきたわねえ」

絶頂のあと、精根尽き果てて倒れている少年二人を眺めながら、ディアナがつぶやく。

「そもそも、そんなお子様ので満足できてるの?」

「大人の男なんて、ガサツで大きくて痛いだけだヨ。」

アタシはこれが一番いいネ。何せ、逆らわないし、サ……最初さえ押さえ込めば、薬を使って三日もあればこんな感じにはできるヨ。女にも使えるし、大人だつてまあ一週間かければ大体壊せるからネ。……あ、そういうや、ディアナにも楽しませようと思つてたノに、寝かせちゃつた。ごめんネ、あとで起こしてまたしようヨ？」

音からすると、チャナは濡らしたタオルで自分と少年たちの体をぬぐつているようだ。ディアナのピアスから、小さい音で僕の意志を伝える。声は聞き取られてしまうから、音だけなのだが。それでもディアナは、僕からの許可が出たことをすぐに理解して、本題に切り込む。

「その力、もっと自由に使いたいと思つたことはない？」

意図を測りかねているのだろう。ディアナの一言にチャナは質問で返す。

「……どうということカナ？ 今の状況には決して満足しているとは言えないケド、ディアナは何をしたい

ノ？」

「あたしね、今日はあんたをスカウトしに来たんだ。あんただつて、今の頭目に心から従っているわけじゃないだろう？」

聞こえてくる音が消えた。チャナが明らかに警戒している。

「ディアナ……あつちで、何かあつたノ？ あいつらに、勝てると思つてるノ？」

「……まあ、そうよね。あたしも最初はそうだっただから……」

空気を切る音、ガラスの割れる音、小さな悲鳴。そのころになつて、ようやく僕は地下の薬草畑にたどり着いた。さあ、対面だ。

※ ※

ディアナの残した仕掛けをたどつて、薬草畑に入る。鳴子などのトラップは既にディアナが解除済みだが、念のためシロにチェックはしてもらつていた。

ディアナは蜘蛛の異形を一部分表に出して、チャナを押さえつけていた。両手は既に糸で搦め捕られ、両

足は押さえつけられている。音を聞きつけて二人の少年奴隷が目を見ますが、シロが手早く押さえつけて縛り上げてしまう。支配されることに慣れきってしまった少年たちは、騒ぐこともせずに従った。

「チャナ。改めて紹介するわ。鉢山村のダンジョンマスターであり、今のあたしの主人であり……あの蜘蛛女を殺し、あたしにこの力をくれたお方。できれば、あなたもあたしと一緒に来てほしいの」

チャナは顔を向けて、こつちを見る。残念ながら、僕の顔は見えないようにしてある……仲間になるまでは、できるだけ自分の顔を明かしたくない。

いや、正確に言えばこれから先はできるだけ自分の正体につながる情報は外に出したくない。とはいえ、全身に染料を塗って肌色を変えるなんていうのも面倒だ。だから、仮面をつけることにした。

祭りで使うような、羽根飾りの付いた道化の面だ。ただし、色を塗ったりする時間も無かったので顔の部分は真っ白。……まあ、壊れやすいものだし、手を抜けるところは抜いておきたいというのも事実だ。

「ディアナから話は聞いているよ、チャナ。……君の作った解毒剤は非常に効果的だった。危なく、僕はディアナを逃がすところだった」

チャナはそれを聞くと、興味を持ったようだ。

「……それはどうもダヨ。名前は知らないけど、魔物サン。友好的になれるかどうかはわからないけど、できれば、どういう状態でどういう効果があったか聞かせてもらえるかな？」

どうやら、自分の作った薬品の効果がどこまであったかに興味を惹かれているらしい。研究者とか、なんというか。まあ、生きるために魔法の道具と付与魔術の研究をしている僕と近いところがあるかもしれないが、この娘のほうがより純粋だ。

「その辺はおいおい話すこともあるだろうね。僕は君の薬と毒の知識と技術に一定以上の敬意を持っている。それは嘘ではないよ。だからこそ、こうしてディアナの頼みもあつて、君を誘いに来たんだ。……単刀直入に言おう。アラクネは死んだ。僕たちが殺した。ディアナはこちら側について、僕の力で、アラクネの能力

を受け継がせることになった」

その言葉で、色々理解したのである。ディアナが異形を見せた時点で、わかってはいたのだろうが、それでも、理解したくなかったのかもしれない。

「魔族……なのかな？」

その声は強がっているが、震えていた。まあ、無理もない。

「まあ、半分は正解……としておこうか。とはいえ、アラクネのように個人で強いというわけではないよ。だからこそ、みんなの力を借りたいのさ。手段を選んでいられない程度に、ね。君に望むのは、僕の仕事に手を貸してほしいということだ。ディアナに聞いたけれども、君も今の頭目に好きで従っているわけではないんだろ？」

その言葉で、チャナの視線が泳ぐ。計算をしているのだろう。ならば、こちらが有利だという情報を提供してあげなければいけない。

「アラクネは死んだ。頭目は二人というから、残り一人。戦力は半分だ。残りの部下たちがどの程度残った

頭目に従うかは、僕には完全にはわからないけれど……まあ、君とディアナ以外をあらかじめ引き入れる気はない。少なくとも、今ならまだアラクネが死んだことは知られていないので、この機会を無駄にする気はないよ」

「……もしかして……」

「僕にはディアナという協力者が居る。そして、今の君は予想できているだろうけれど、遠征軍が無事で、暗殺は失敗して、アラクネが殺されたという情報はまだ君にしか知られていない。遠征軍が無事戻ったという伝令は、早ければ明後日の昼には届くだろう。だから、僕は明日には……暗殺ギルドを襲撃して、乗っ取るつもりだよ」

チャナは悩んでいる。おそらく、この葉草畑の中にはどこかに脱出ルートか、何らかの伝達方法があるのだろう。暗殺ギルドに恩を売るか、僕に付くか、どちらが望ましいのかまだ悩んでいるのだ。……ならば、予定通り押すでしょう。

※ ※

「ディアナ、君の望む通りにしよう」

その言葉を聞いて、ディアナが喜んで擦り寄ってくる。

「シロ、サラ。君たちも僕の眷属として覚えなければいけないことがある。そこの二人の少年を解放して……二人とセックスをするんだ」

その言葉を聞いて、チャナとサラが同時に声を上げる。

「アタシの子たちをどうするのよ!!」

「は？ 一体何をさせるのよ!!」

……同時に言われても、聞き取れるとは思わないでほしい。

「まず、チャナ。別に君から永遠に奪い取るなんて気はさらさらない。ついでに、僕には■■■■だっていわれても、男を抱く趣味はない。これは、君に対して僕の力を見せるための宣伝みたいなものだと思っほい」

次にサラを呼び寄せ、抱きしめて唇を奪う。動きを止めて思考停止するサラに、改めて自分の考えを伝え

る。

「あと、サラ。シロと一緒に、さつき食い入るように見ていたろう？ 別に君が少年趣味の変態だと言いたいわけじゃないよ。……それに、君には特にこれを見てもらわないと困るんだ。僕の魔力を受けて、その上で魔法の知識があるのは君だけだ。たぶん、君のほうがシロよりもうまくやれるよ……僕と同じようにね」

※ ※

シロがすべての入り口の鍵を閉めなおし、トラップを仕掛けなおして戻ってくる。伝声管があったらしく、機能は止めてくれていたのはありがたい。少年たちはこれから何が始まるのかわからないようで、こちらを不安そうに見ている。

「あの……俺たち」

「これから、どうなるんでしょう……?」

おびえた子犬のような目だ。おそらく、持ち主が負けて、自分たちの主人が変わるのではないかと思っているのだろう。

「ああ、大丈夫。君たちを痛めつける気はない。……結構強い媚薬を使われているみたいだね。まだ出し足りないのかい？」

少年たちのペニス再び勃起していた。どうやら、かなり性欲を強化するような薬を盛られているようで、盛りっぱなしに近い。二人は恥ずかしそうに頷く。

「シロ、サラ。この二人とセックスしてあげるんだ。ハリーとフレッドといったね。このお姉さんたちに気持ちよくしてもらってくれ。少し体に模様を描くけれど、それ以外は自由。相手にある程度任せて。自分も、相手も気持ちよくなるようにがんばるんだよ？」

※ ※

シロは無邪気に、サラは恥ずかしそうに衣服を脱ぐ。僕の血と精液、それにサラの愛液も混ぜて作った染料を使い、床に簡易的な魔法陣を描く。染料の量に限界があるので、あまり大きなものは描けないが、まあ十分だろう。

少年たちの体にも、魔力が伝達しやすいように紋様を描く。特に、背中から後頭部のあたりには念入りに。

今回はある意味実験でもある。サラとアスタルテ、それに自分で研究してある程度アレレンジを加えてあるが、果たしてどう作用するだろうか。

※ ※

チャナは現在縛られた状態で見学中。ディアナは、チャナに見せつけるように僕にしなだれかかってきた……まあ、ご褒美くらいはあげていいだろう。

中途半端に元気になっていたペニスを出して、ディアナの前に突き出す。ディアナは嬉しそうに微笑むと、ためらうことなく啜える。

チャナは僕のペニスを見てヒッと小さく悲鳴を上げ、少年たちは興奮に当てられたのか、サラには褐色のフレッドが、シロには白い肌のハリーが近づいていく。そして、三組の男女が絡みだす。

「ああっ……！ お姉さん、お姉さん、ぼくっ、ぼくもうでちゃう！」

「ちよつと、まだはやっ……。もう、仕方ないわねえ……まだ硬いじゃない。ボク、まだできるの？」

褐色の肌のフレッドは、女の子のような整った顔を

快楽に歪ませる。我慢できずに射精しながら、それでもサラの中に自身のペニスを突き込み続けようとする。「まだ……まだ出し足りないよう。もつと。もつと出したいの……」

「……いいこと、ボク。慣れてないとは思うけど、もつとゆっくり……そう。できるだけ我慢して……」

サラは自分以上に性経験の少なそうなフレッドを相手に、ぎこちなくもリードをする。そうしながらも、相手の快感と自分の快感を測り、魔力の流れをつかもうとしているのだろう。

僕にはアスタルテ以外にも魔物を作り出せる配下が必要だったし、アスタルテと同じ淫魔サキユバスであり、魔術師でもあるサラは最も有望な候補だ。

正常位でフレッドを迎え入れながら、自分でも腰を上げて快楽を搾り取ろうとしている。隠していた小さな羽根と尻尾が表に出て、尻尾がフレッドの脚に、尻に絡みつく。

「ふあつ？ こ、これ……」

「ああ、気にしなくていいのよ。ボウヤ、さつきお友

達のお尻におちんちんを入れるとき、自分でもされたって言ってたわね？」

「あつ……はい、チャナ……様に、めいれい、されて……」

「どっちが好きなの？ 男の子としてするのと、女の子としてされるのと」

「あつ、どっちも、どっちもですう！ おちんちんも、お、お尻も気持ちいいですう！」

「うふふ……可愛い。癖になる人が居るのも、ちよつとわかるわね」

少年を見つめる瞳は淫欲に濡れ、その姿はもういっぱしの淫魔サキユバスだ。……まあ、僕自身アスタルテとサラ以外のサキユバスには会ったことがないのだけれど。

※ ※

「うっ……や、やめて、激しいっ。でちゃう、オレ……っ！」

「うふふ、出していいんだよお。ハリー君だっけ？

ご主人様からいいって言われたから、シロのおま○この中にあつたかいのをピュピュッて出しちゃつても。

お口でも、お尻でもいいから……ね？」

少しナマイキそうなハリーは、シロにさつきから乗っかられたままだ。口調は男っぽくても、ハリーはどうやら受け身なようで、さつきからシロにリードされればなした。

シロが小柄と言っても、ハリーやフレッドに比べればまだ身体は大きい。僕に抱かれるまで、大人の男に無理やり慰み者にされてばかりいたシロは、力づくで■い少年を抱く経験に興奮しているようだ。

「ほら、君たちにはないでしょお？ おっぱい、触っても、つねつても、舐めてもいいんだよ？」

ハリーの両手をつかみ、自らの乳房にあてがう。少年が必死に腰を振りながら、シロの胸をこねくりまわそうとするが、大きめの乳房に対し、少年の手のひらはまだ小さく、つかみきれない肉があふれ出すような状態になった。

「ほらつ、ほらつ、どんどん出してえ。もつと腰を振って！ お姉さんで、いっぱい気持ちよくなつてね……？」

シロが自ら女性上位の体位で激しく腰を振る。珍しい体験に、シロの尻尾がパタパタと揺れる。声も出せないまま、ハリーがおそらく二回目の射精をシロの中に放つ。シロとハリーの結合部から、愛液に混じって白く濁った精液が漏れたす。

「あははつ、ご主人様あ。この子、まだ元気なままですう!!」

シロが体を倒し、ハリーの上に覆いかぶさる。舌と指先で薄い胸板……乳首を責める。少年が女の子のような悲鳴を上げる。

※ ※

「アタシの……アタシの玩具を取らないでヨ！ ひどいヨ、ディアナ。なんデこんなことするノ？」

蜘蛛糸で両腕を拘束されているチャナが、僕ではなくディアナに言葉をかける。ディアナはそれに答えず、椅子に座った僕のペニスを舌先でチロチロと舐め回し、奉仕を続ける。途中でようやく上目遣いに僕のほうを見たので、小さく頷いて答えるように促す。

「ああん……もう、もうちよつとご奉仕したかったの

に……チャナ、あなたが用心深いのは知ってるから、動けないようにしてたのよ。どうせ、殺されることはないだろうって考えているでしょ？ 基本は、そうよ？ だって、あたしがあなたをご主人様に推薦したんだもの。今、こうやっているのはあなたにご主人様の素晴らしさを知ってもらうため。……あなた、こうでもしないと逃げそうだし」

「人を縛り付けて犯すナンテ、今のギルドと変わらないじゃない？」

チャナの言い分は、この状況だと正直もつともだとは思わう。それでも、僕がまだ何か言うべきときではないだろう。

「あら、そうでもないわよ？ 少なくとも、あたしは今自分の意思で抱かれないと思ってるし……あなたも、きつとそうなると思ってる」

それだけ言うと、一気に僕のペニスを喉の奥にまで呑み込み、頭を大きく振って奉仕を始める。呼吸も苦しいだろうに、それでもディアナは嬉しそうに見える。ふと気がついて、右足を上げて、ディアナの股間を

まさぐる。

「んぶっ……はあん」

既に股間は愛液が漏れださんばかりになっていた。急に与えられた刺激に、ペニスが唇から飛び出し、ディアナの鼻先を叩く。

「ディアナ。お友達の前で這いつくばって、お尻を高く掲げてくれるかな？」

その言葉に、ディアナは返事をするのも惜しいというように従う。縛り付けられたチャナのほうを向いて、ディアナが頭を下ろし、尻を突き上げる。背中から生える蜘蛛の脚が伸びており、チャナの前で蜘蛛女が威嚇しているようにも見える。とはいえ、その顔は淫らな被虐の喜びに満ちている。

「ディ……ディア、ナ……？ その体……それよりも、その顔……」

チャナが震えているのは、ディアナの背から伸びた蜘蛛の脚になのか、それとも付き合いの長い友人の隠された性癖を見たからなのか。

「チャナ、これが、あたしがもらったもの……。ご主

人様あ……ご主人さまあ、ディアナを、ディアナを犯してえ……」

無言で立ち上がり、掲げられた、小ぶりで引き締まった尻肉に平手を打ちつける。パンと小気味よい音がして、ディアナが小さく悲鳴を上げる。

「ディアナ。悪い子だね……友達の前で、こんなことをして。説得をまじめにやらなかったのも、そこに居るチャナに見てもらいたかったの？ 自分は犯され、魔物に変えられ、それでもこんなに喜んでしまうマゾですって知られたかったの？」

「う、嘘でシヨ……？ ディアナ、が……マゾ……!？」

チャナが信じられないというようにつぶやく。部屋の中で抱き合っているハリーとシロ、フレッドとサラが音に驚き、動きを止める。

「すげえ……あんなのもあるんだ」

「あはつ、なら、君もやってみる……?」

「あのお姉さん、叩かれて喜んで……」

「あいつは、そういう奴なのよ……ボクもそうなの？」

二組の男女の周囲には、何発も放出された精液が水溜まりを作っており、シロとサラの股間は既に精液で泡立っている。

ゆっくりと時間を置いて、二発、三発とディアナの尻にスパンキングを与える。嬌声が響き、ぼたりぼたりと愛液が床に垂れる。

「はや……早く……早く、ご主人様のチンポ……ぶち込んで、ぶち込んでください……」

「……いいだろう。でも、なんでディアナが僕に命令するんだい？ 君は僕の奴隷になりたいって言ったよね。そんな奴隷には、お仕置きを与えないと」

もちろん、怒っているわけではない。ただ、ディアナはそうしたほうが喜ぶのだ。ゆっくりとペニスをあてがい、一気にディアナを貫く。

「おごおつ……」

空気が抜けるような声を上げて、ディアナの股間から温かい液体が床に流れ出す。どうやら快楽とシヨックで失禁したようだ。

「いいつ、素敵です、ご主人様あ！ 残酷で、ひどく

て……素敵」

ディアナのショートヘアを強く握り、無理やり体を起こさせる。縛り付けられたチャナの前で、立ち上がった状態で背後から僕に犯されている。

チャナは目をふさぐにもふさぎきれず、ちょうど自分の目線のあたりで出し入れを繰り返す腰の動きを見続ける羽目になっている。

「うそ……大人のガ……ディアナの、……二……」

つかんだ頭を無理やりこちら側に向けさせ、強引にディアナの唇を奪う。犯されながら、ディアナは積極的に舌を絡め、小さな唇で精一杯僕の唇を覆い隠そうとする。

そんな状態にありながら、僕は背後で進んでいる少年たちのセックスの中で、シロとサラから僕の魔力が少年たちにしみ込んでいくのを感じていた。あちらも、どうやら絶頂に達しそうだ。こちらが射精するところにタイミングを合わせられれば、まとめて魔物にすることもできるというのが、サラと僕の予想だ。何度かやっていくうちに、タイミングを合わせなくてもできるよ

うになるのではないかと思うのだが……まだ、そこまでは僕の技術が追い付いていない。

「あつ、あつ……ごめんなさい、ごめんなさい……あつ!!」

その瞬間、ディアナが全身を硬直させて一人絶頂に達する。しまった、注意が外に向いていた分、ディアナの状態を確認できていなかった。

「あつ、でるっ、お姉さん、オレ、オレ……っ!!」

「でます、まだでちゃいます、おちんちんからどびゅどびゅってえ!」

数秒置いて、少年たちが耐えきれずに射精し、シロとサラも絶頂に達した。チャナを萎縮させているのはいいとして、魔物化の連鎖実験は中途半端な結果に終わってしまった。

※ ※

「うわ……からだか、体が熱い……!」

サラは見事に自分を抱いていたフレッドを魔物へと導くことができたようだ。びくびくと震えるフレッドの腰には薄い獣毛が生え、膝が逆方向に曲がり、素足

には蹄が浮き上がる。さらさらの髪の毛に、ねじれた山羊のような角が……年相応の小さな角だが……生えてくる。

「……サテユロス、か。中途半端な変身のようにだから、あとで魔力の調節を覚えれば人間の中で生きていけるかな？」

そんなことを考えていると、シロが焦った様子で声をかけてきた。

「ご主人様、この子、なんか状態が……!?!」

振り返ると、ハリーが苦しそうにうめいている。近づいて、魔力の流れに目を凝らす。

……ああ、この前の自分と同じだ。魔力が中途半端に流れ、かといって魔物になりきれない状態で体内で暴れているのだ。僕が射精する前にディアナが絶頂してしまったので、魔力操作ができないシロと抱き合っていたハリーには魔物になるきっかけを与えられなかったのだ。

「まずいな、もう一度理性を飛ばすスイッチを入れてあげないと」

「でもでも、ご主人様あ。この子もう何回も何回も出して、今はしおれちゃってますう……」

……困った、あまり状態がよくない。僕は今のところ、相手が性的な絶頂を感じたときに精神のタガをはずし、そこで魂を蹂躪する……魔物になるスイッチを入れる方法しか知らない。もう一つあるにはあるが、いくらなんでもこの少年を死なせて、ゾンビを作るのはあまりにもむごい。

「あ……お姉さん、お兄さん……おれ、オレ……からだ、体が熱いよう……」

熱っぽく潤んだ瞳で、ハリーは泣きそうな声を上げる。

「ご主人様、まだ出してないですよね？」

「……えっ？」

「この子、そっちのほうも慣れてるみたいだし。ご主人様のおちんちんで、この子を女の子として犯してあげたらいいと思うんですう」

「ああ、そういうことか……って、ええ!?!」

……くそ、こんなことになるとは思わなかった。さっ

き射精しそこなつたせいで、中途半端に勃ちっぱなしになつているペニスをシロの顔の前に突きつける。シロが四つんばいになつて僕のペニスに奉仕を始めると、条件反射なのか、シロの体の下で仰向けになつていたハリーも一緒に舌を伸ばし、僕のペニスに奉仕を始める。

……男子の娼婦がいて、一定の需要があるとは聞いていたが、女性を買うものだけなのだと思つていた。しかし、この子は、明らかに男に買われることも想定して調教されている。もしかしたら、この男っぽい口調も客の好みに合わせるように、あえてそうさせられているのだろうか？

思考が混乱する。

「……」といえど、シロが一緒といえど、男にペニスを舐められるのは奇妙なものだ。

奇妙な嫌悪感と罪悪感と興奮が混じり、ペニスはすぐに力を取り戻した。……果たして、僕は大丈夫なんだろうか？

混乱しているとはいえ、やらなければいけないこと

はわかる。あまり長い時間放置しても仕方ない。シロとハリーの後ろに回ると、二人の結合部を覗き込む。

ハリーのペニスは既に力を失い、シロから零れ落ちている。……シロの愛液を掬い取り、ハリーの尻穴にもみこむ。

やはり、何度も使われていたのだろう。僕の指は抵抗なく吸い込まれ、きゅつと締め付けられる。

「あつ……オレ……ぼく……あのっ……熱い……」

最初の強気な様子は一瞬で溶けてしまい、媚めを含んだ弱々しい口調に変わる。

最初にチャナに使われたときも同じようだったし、あえて男っぽい口調を使うように指示されていたのだろうか？

シロに上に乗られているためにこちらを向くとまてはいかないものの、ハリーは不安そうな潤んだ瞳で僕の動きを追おうとする。……おそらくは、性奴隷として訓練されたのだろう媚びた動きは、本人が意図していなくても興奮を誘うだろう。

僕自身の偏見もあるかもしれないが、僕に男を抱く

趣味はない。とはいえ、それ以外に、助ける方法が思いつかないのだ……はあ、この子が女の子だったらなあ。

まずは、四つんばい状態でハリーを押さえつけているシロの膣にペニスを突き入れる。

「あつ……ご主人様の、きたのつ、いきなり大きいのお……！」

いつも以上に熱くなっているシロの膣内でしばらくその感触を楽しみ、愛液で濡れたペニスを抜き、狙いを定める。女性の尻を犯すことは何度もやっているのに、相手が少年だというだけでかなり気持ち的には抵抗がある。

とはいえ、放置すればこの少年は死んでしまいかねない。そうすれば、本目的であるチャナの感情が一気に冷め、敵対的になるだろう。それは避けたい。半ば自分を鼓舞するため、声を出して宣言する。

「ハリー、今から君を犯す。女の子みたいに、声を上げて感じてしまってもいい」

ハリーは驚いたように、わかっているはずの宣言を

した僕に目を向けた。

「……オレ、女の子みたいに……？」

シロにのしかかられ、仰向けになった状態で体を固定されているハリーに挿入する。……愛液やチャナが使わせていた潤滑剤があつても、入り口がかなりきつい。だが、チャナによる調教のおかげか、入り口さえ越えてしまえばあとは滑らかに挿入することができた。

「ふああああつ……オレ……男なのに……こんな……」

ハリーの困惑した声が聞こえる。自意識は男、快感は女（と、ハリーには思えるものなのだろう）。そのアンバランスに精神が揺れている。おそらく、最初からこうではなかったはずだ。チャナの調教の成果に、僕はただ乗りしているにすぎない。

……そう考えながら、ふと思いついたことがある。案外、できるのではないだろうか。ハリーの言い分や希望も聞くべきだったのかもしれないが、気がついたら思いついたことを試し始めていた。

「君は男でも女でも、どっちでもいい。女の子になり

たいなら、女の子になつてしまえばいい」

ペニスに意識を集中し、ハリーの中にある僕の魔力の流れをつかむ。行き場を失つて、出口を探してハリーの体内で暴れている魔力に方向性を与え、制御し、僕の考えたことを組み込んでいく。今までは無意識のうち。今回は、意識して相手の存在を書き換える。

……おそらくは、相手の思考さえも。

「さあ、君の望みを教えよう。君は、女の子になつたかつたんだろう？」

……ああ、わかつた。これだ。これが、相手を調律するということか。

僕は今、自分の都合でハリーという少年の存在自体を書き換えようとしている。もともと、ハリーにそんな望みはなかつたのかもしれない。奴隷として調教され、嫌々身につけた習慣でしかなかつたのかもしれない。

しかし、それを本人の望みなのだと決めつけ、その通りに精神も、肉体も書き換えることが、今の僕にはできる。すべて変えてしまうことはできないまでも、

方向付けて、そつち側に調整することができる。まるで、ピアノの音程を自分好みに調律するかのよう。

「あつ……胸が、お尻が……オレ、オレ変だよつ、何か来た、きたつ。怖い、怖いよう!!」

「ハリー、安心して。ご主人様がきつと気持ちよくしてくれるの。何も怖くないから、受け止めて」

快感と魔力の蹂躪によつて、自分の体に変化する恐怖にハリーが泣きだす。シロはその詳細はわからないまでも、ハリーの涙を舐め取る。ハリーのペニスが力を取り戻し、ピンと起き上がったので、無造作につきかみシロの脛にあてがう。

「シロ、ハリーの男の子も相手してやるんだ」

「あははつ、ボク、こつちも元氣になつたんだ♪」

「ふあああああ、わかんない、わかんないよ! どつちも、どつちも気持ちいいよう!!」

ハリーの嬌声をどこか遠くで聞きながら、僕はイメージする。

体内に、存在しない臓器を。体表に、存在しない器官を。魔力を操り、形を思い浮かべる。そうあるよう

に、作り替え、固定する。

「なんか、なんか来る！ 来る！ 怖いよ、怖いよう、ああっ、あああああああ」

自分の体に変化していることが理解できているのだろう、快感と未知の感覚への恐怖で理性のタガがはずれたのか、ハリーはシロに抱きついて泣きだしてしま

う。
「大丈夫……止めちゃうの。人間を止めて、エッチな魔物になっちゃうの。あたしと同じように、ご主人様のメスに……あつと、キミは男の子だけ……ご主人様の、魔物になるの」

シロが囁いた言葉は、凶らずも正解を言い当てている。僕が狙っているのは、それだ。縦に並んだハリーとシロの尻に交互にペニスを差し込む。ハリーのペニスはシロのおま〇こに差し込まれ、快感に動くこともできない状態で震えている。シロとハリーの快感が共鳴するかのように高まり、同時に僕の限界も近づいてくる。

「行くよ、ハリー。さあ、心も体も、混ざってしまう

んだ……っ！」

「ふああっ!? あ、あつ、あああああああ！」

ドクンっ、ドクンと、大きく二回に分けて精液がハリーの腸内に叩きつけられる。同時に、ハリーのペニスもシロの膣内で射精したのを感じる。そして……

ゆっくり体を離し、ぐったりとしたハリーを観察する。少年的なショートカットや面差しはそのままだが、体つきが少し女性的になった。胸が少しだけ膨らみ、力なく垂れ下がったペニスの下に、新しい器官……女性の膣が生み出されている。

「エリオット……あんた、もしかしてその子を女に改造したの!？」

一息ついていたサラが目ざとくそこに気がつき、口を挟む。

「僕には同性愛の趣味はないからなあ……できるかなと思つて少し調整してみた。完全に女にするまではいかなかつたみたいだけど、女にもすることができた、と言うべきかな？ ほら、最初にサラのべったんこの胸を少し大きくしてあげたる？ あれの応用だよ」

「ああ、あれならもうちよつと大きくしてくれても……つて、何言わせるのよ!? ……つてことは、この子は……」

軽口を叩きつつも、サラはこのことが示す事実を理解しようとしている。

「自分でも、できるかどうかはわからなかった。でも、わかった。精神を強制的に書き換えることは、やはり難しい。ハリーみたいにもともとその傾向があったり、そういった調教を受けていたからこそ容易だったのは事実だけれど……僕は、相手の性別も変えることができるようになった。いや、いずれそうなるだろう」

※ ※

「ハリー……あ、あの。ご主人様……?」

先ほど無事にサテユロスとなった褐色のフレッドが、同じ境遇だった少年を心配している。僕が主人だということとは本能的にわかるようで、僕に伺いを立ててくる。……ああ、そうだ。あれが無事に動いたかどうか見ておこう。

ディアナにはチャナをもてなして、おくように伝え、

フレッドに向き直る。

「フレッド。君はこれから僕のために働いてもらう人として姿を保つ術も教えるし、働いて給料をもらう生活も与えてあげる。その代わり、キミの人生は今からもう僕のものとなった。……それはもう、わかっているね?」

実際には、必ずしもそうとは言えないのだが、成り行きとはいえこれは契約だ。無理やり精神を支配することはできるけど、可能なら納得した上で僕の支配下についてほしいと思うのは僕のわがままだろう。

「……はい。ボクはご主人様の下僕です。どっちにせよ、チャナ様の玩具として生きる以外には道もなかつたし。文句を言えるような立場じゃないし……」

奴隷根性が染み付いている、と文句を言うのは簡単だろう。しかし、僕は彼らがどんな人生を送ってきて、どうしてここに居るのかも知らない。一応精通している年齢で、農村部では立派な労働力になるとはいえ、まだまだ■■なのだ。そんな年齢で保護者も失い、奴隷として暮らしていたのであれば、きつとたいいては

こうなるのだろう。

だからといって、彼らを物として扱ってよいわけではない。そんなことはわかってはいるけれど、僕は彼らを魔物にして、下僕にして、道具にしている。わかつた上で行う悪事と、知らずに行う悪事、たちの悪いのはどちらなのだろうか。

「ああ、そうだね。僕はできるだけ、優しい主人であるよう努力しよう。それでも、僕は魔物で悪党だ。僕に拾われたのが幸運なのか不幸なのかはわからないが、それだけはあきらめてくれ。……ハリーも今無事に魔物になった。キミとは違い、淫魔の変種……両性具有の淫魔になったよ。ハリーとは、仲がよかつたの？」
フレッドにどこまで伝わるかはわからないが、説明だけはしておく。

「ハリーとは、同じ奴隷商人のところに買われて……ボク、こんな外見だから奴隷の中でもいじめられてたけど、ハリーは仲良くしてくれて……」

フレッドはそう言うと、ハリーを見る。その瞳は、隠しようのない欲情の光が見える。フレッドの股間で、

ペニス勢いよく立ち上がっていた。

「フレッド。ハリーは今男の子でもあり、女の子にもなった。もしかして、君はハリーを抱きたいのかい？」
その一言で、フレッドの顔色がさっと変わる。自分の欲望を自覚したのだ。ハリーもようやく意識を取り戻し、自分の体と、自分を欲望に満ちた目で見つめるフレッドの姿を見つける。

「あ……オレ、一体……この、これ……からだ……フレッド……オレ、オレ一体……？」

【憑依】。フレッド
小さい声で、あらかじめ設定してあつた起動呪文を唱える。自分の視界に、二重写しになるように同じような光景が映る。目を閉じると、自分の視界とは明らかに視点の位置が低い光景……フレッドが見ている映像が見える……よし。

【憑依解除】。【憑依】。ハリー

連続で切り替えができることを確認する。再び視点が切り替わり、目を閉じている自分自身と、ペニスをたぎらせたフレッドが見える。よし、ハリーの視界に

切り替えることもできた。

※ ※

……これが、今回この少年二人を魔物に変えるときに仕込んだ機能だ。この二人の魔物は、自分自身でものを見て、考えて、行動することができる。しかし、ある条件の下では僕に視界を提供する……考えを読み込み、場合によっては短時間支配することもできるだろう。意識を集中して、ハリーの考えていること、感じ取っていることを……ん？ ……!!

下腹部に存在しない感覚を受けて、一瞬意識が乱れる。……そうだ、これがあった。しくじった。

サラヤシロ、他の女たちにこの仕掛けを組み込んでいなかった理由はここだ。もちろん、魔物化するときには仕込むのが一番問題が起きにくいという理由もあるが、僕自身に存在しない器官の感覚を受け取ると、自分がその感覚情報を処理しきれなくなつて、混乱してしまうのだ。今、ハリーから受け取ったのはハリーの膣と子宮……先ほど生み出してしまった、女性としての器官の発する感覚だ。とはいえ、この程度ならば慣

れば耐えられる。時間を見つけて、他の魔物たちにも仕込んでおこう。

「……っ！ 【憑依解除】」
（ポゼッションオフ）

呼吸を整え、見つめ合つたまま動けない少年二人に声をかける。

「フレッド。キミに最初の命令であり、最初のご褒美をあげよう。……ハリー、今君は、フレッドに抱かれないと思つたね？」

「……えっ？」

「……なっ!!」

フレッドが疑問の。ハリーは驚きの声を上げる。そう、さつき受け取つたハリーの中の女性器の感覚情報は、おそらくは興奮。ハリーは今、女性としてフレッドに抱かれないと思つているのだろう。

「ハリーは魔物になり、女性としての機能も持った男でもあるけれど、女でもある。そして、今君のその勃起したペニスを見て女性としてのハリーは興奮している。……まあ、今までの経験で君に抱かれたことも、君を抱いたこともあるんだから、わかっているんだろ

うね。改めて命令だ。フレッド、女の子としてのハリーを抱いて、処女を奪ってあげるんだ」

……それとも、悩んでいるなら僕が奪ってしまうけど、いいのかい？ と、悪戯っぽく付け加える。二人の少年……片方は女でもあるが……は困ったように見つめ合い、近づき、絡み合い始める。これで、あの二人は様々な意味で離れにくい存在になっただろう。

あの二人の人生はもうめちやくちやだし、それに止めを刺したのは間違いない。僕だ。奴隷の生活から救い上げ、これからは食料を、着る物を、そして仕事を与え、歪んではいても幸せな生活を与えよう。そうすれば、もう、二人をくつつけた僕からも離れることは難しいだろう。……裏切れない手駒ができたのは、嬉しいことだ。自分の利益を考えないのであれば、この行き場を失った二人の少年奴隷を無傷で解放し、結果として路頭に迷わせるほうが正しかったのかも知れない。……果たして僕は悪人だろうか、善人だろうか。

悪党であろうとしているが、それがうまくいって

るのかは、未だにわからない。自分が行っていることが善行だとはとても思えないが……さて、悩み事と寄り道は終了だ。いよいよ、今夜の本当の目的であるチャナを喰としていくでしょう。

※ ※

「……待たせてすまないね。あの二人は、君と僕が友好的な関係を結ぶことができたなら、君にお返しすることを約束しよう」

サラとシロは既に次の準備を行うため、外に戻っている。ディアナはチャナの衣服をすべて剥ぎ取り、糸でその肉体をデコレートするように縛り上げていた。肉付きの薄い褐色の肉体に、白い糸がコントラストを刻む。

「ホントカナ？ 暴力で勝てるやつってのは、たいてい口約束を暴力で踏み倒すからネ？」

チャナは震えながらも、気丈に答える。

「まあ、暴力で踏み倒すこともできないはないよ。実際に、君の上役であったアラクネの命を奪ったのは僕たちだからね。とはいえ、君を無理やり支配するつも

りはあまりないんだ。無理強いして魔物にしても面倒なだけだし……最悪、心を壊してしまう。ディアナを魔物にするときだって、この子も、君の作った解毒剤も優秀だったからね……危なく命か精神を壊してしまふかと思つた」

「……その割には、かなり気を使つてくれましたよね？ 拷問をされている最中に、体力の維持のために食事を取らされるなんて思つてもいなかつた」

ディアナは笑つて答える。まあ、その腕は惜しかったからなあ。

「なので、ディアナの推挙もあつて、君をスカウトに来たのさ。君の腕を見込んでね……毒使いのチャナ」

「で、もし断つたら？」

チャナが聞く。まあ、なかなか凶太い。

「そうだね。あの子たちは僕が連れて帰つてしまふ。そして……放置もできないし、殺す気もないけれど……君が僕と仲良くしてくれる気持ちになるまで……」

そのとき、ちょうどいいタイミングでシロとサラが

オークリーダーを連れて帰ってくる。

「僕の部下であるあいつと、仲良くしてもらうかな？」

オークリーダーはこちらを見ると、チャナを見つけて興奮した声を上げる。

「ひっ……!? ま、魔物!? 街中に!？」

魔力からして他の女たちは僕の配下だとわかるので、オークリーダーは許可がない限り手を出せない。つまり、僕の配下の魔物ではなく、捕まっている状態のチャナは、オークリーダーの認識では犯している獲物として映らないだろう。

オークはもともと他種族のメスを襲つて犯すことを好む傾向がある。食欲と性欲を満足させることができるれば、その辺は容易に押さえ込めるタイプのものではあるが、久々にその欲求を満たすことができると思つたのか、オークリーダーのペニスがゆつくりといきり立つ。

「だから、ディアナの紹介にあつたらう？ 僕は人食いダンジョンのダンジョンマスターなのさ。だから、魔物を連れてくる。さあ、君はどつちがいい？ ああ

オークに無理やり仲良くさせられるか、進んで僕と仲良くするか」

糸のように細い目を、少しだけ大きく開き、焦ったようにチャナはつぶやく。

「あはは……これは、とんだ悪党だったネ。ディアナが惚れたのもわかる気がするヨ。降参、降参だから、オークに犯されるつてのは勘弁してほしいナ」

「ああ、では契約成立だ」

指を鳴らし、オークを戻させる。オークリーダーは不満げにしているが、シロに慰めるよう指示をしていた。外に出すのも手間なので、奥の部屋でシロがオクに奉仕を始める。

……人間だったころは、あれほどオークリーダーの素体になった男におびえていたのに、今では榮しそうに体を重ねることができている。シロは、魔物になってよかったのかもしれない。

同時に、サラがハリーとフレッドを連れて戻ってくる。黒いサテュロスのフレッドは誇らしげにハリーの手を引き、白いふたなりの淫魔となったハリーは、股

間から破瓜^{はか}の血を滴らせ、それでもベニスを興奮に半勃ちにしたままで、フレッドに手を引かれてやつてくる。

「チャナ。君は今から、僕の配下となる。……では、今からあの子たちを返そう。今日から、僕の直属の下であるあの子たちが、君の新しい支配者となるんだ。フレッド、ハリー。チャナは今日から君たちのものだ。……二人で、楽しんであげるといい」

ディアナに指示して、拘束したままのチャナを糸で吊り上げ、立ち上がらせる。まだ小柄な二人が前後から犯しやすい高さで、両足を開いた体勢で固定する。

「え!? ちょっと? 聞いてないヨ? どういうこと!?」

チャナは狼狽し、慌てた声を上げる。旧友であるディアナは悪戯っぽく、答えを返す。

「あんな、 を抱くの好きでしょ? 子供のころ、大人たちに無理やりされたせいで、大人に抱かれるのが怖いよね? だから、あのオークじやなくなつて、この子たちがあなたを抱いてくれるのよ。あとで、ご

主人様にも抱いてもらおうといいわよ？」

「あ、アタシはリードされるのは苦手なんだヨ。だから、これ離してくれないカナ？」

意外な答えだ。案外慣れていないのかもしれない。

「詳しい話はあとにしよう。チャナ、君が僕の配下になってくれたことを記念して、君を歓迎しよう。まずは、今魔物になったばかりの二人に抱かれるのを楽しんでほしい……いずれ、君も魔物になるんだから」

「え……あ、あのサ？ ハリー？ フレッド……？」

チャナがおびえた表情を見せる。自分が自由にできない状況で犯されるのは、本当に苦手のようだ。

「チャナ様……今まで、色々してくれたよね」

少女みたいな整った顔立ちなのに、オスとしての自信をつけたフレッドが一步近寄る。

「チャナ……様。オレ、嫌だつて言ったのに、お尻にいつぱいいつぱい、変な玩具を入れたり……」

少年っぽい顔に、気弱な表情を浮かべてハリーが近づく。まるで、フレッドに従っているようだ。

「二人とも。その子は今は君たちの部下だ。チャナ様っ

て、言っちゃだめだよ。君たちの主人は僕で、チャナは僕と君たちの配下。……今までされたことを、お返ししてあげるといい」

チャナは交渉によって僕の部下になることを了解してくれた。それを、心の底から信用することができないのは僕の弱さだ。だから、チャナの心を少しだけ突き崩して、僕が支配できるようにする。そのために、彼女のプライドをいったん壊す必要があるのだ。

チャナの口から、ひっ、と小さい悲鳴が上がる。

「チャナ……今は、僕がチャナのご主人様だよ」

「今までされたことを……チャナ様……、チャナに、返す……？」

チャナが奴隷の主人として慈悲深い存在であったならば、きっと優しい愛撫が待っているのだろう。そうでなかった場合は……

※ ※

「もうやめてヨお……お願い、お願いヨお……」

宙吊りにされた状態で、毒使いのチャナは弱々しく悲鳴を上げる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>